

戦争がこれから始まるという時は、戦いの準備をしなくてはなりません。アメリカ南北戦争の最初の大会戦であるブルランの戦いは、まさにこのことをよく表しています。1861年4月上旬にサウスカロライナ州がサムタ要塞で攻撃を始めたとき、北軍も南軍も慌てて戦いの準備をしました。7月上旬には、両軍とも戦いの準備が整い、簡単に勝負がつくと確信していました。合衆国軍(北軍)の指揮官であったマクドウェル准将は、戦いの前日に兵士たちに向かって、唯一心配なのは敵軍が十分応戦できないことだと語りました。北軍の勝利は必至であるように見えたので、この戦いはその夏の社交行事くらいに考えられていました。翌朝、上流階級の婦人や紳士たちは、出かける準備をして、荷物を馬車に載せ、ブルランへピクニックに出かけたのです。

しかし、その日はピクニックどころではなくなりました。戦場は、誰も想像しなかった混乱と恐怖に陥ったのです。軍の指揮をしていた者たちは、このような大規模な戦いに慣れていませんでした。連合国軍(南軍)の指揮官ストーンウォール・ジャクソンの率いる部隊が銃剣突撃をかけるまで、激しい戦いが続きました。合衆国軍は、三千人の死者、負傷者を出しました。上流階級者たちは、ワシントンから逃げ出しました。合衆国軍は戦いの準備ができていなかったため、惨敗に終わったのです。

パウロは、テモテに準備をせずに戦いに出てほしくありませんでした。神様とサタンとの霊の戦いは、社交行事ではなく、決死の戦いであることをパウロは理解していました。ですから、彼は若いテモテに、霊の戦いに備えて「勇敢に戦い」なさいと命じました。(18節) パウロは信仰の父として語っていただきますが、ここでは特に指揮官として「テモテよ…この命令をゆだねます。」と言っています。(18節) これらは、テモテの出動命令であり、パウロの号令はテモテにゆだねられた命令です。霊的には、テモテはもはや市民ではなく、神様の軍に属する兵士でした。また、テモテは福音を教える牧者ですから、歩兵ではなく指揮官でした。彼に与えられた霊の命令は「以前あなた(テモテ)についてなされた預言に従」うことです。(18節) これは、どういう意味でしょうか。おそらく、パウロは、テモテの按手の際に起こった出来事のことを指していると考えられます。1テモテ 4:14から、テモテが按手を受けた(長老たちがテモテに手を置いた)とき、「預言によって」聖霊の賜物を与えられたことがわかります。テモテが受けた神様の働きへの召しは、預言によって確かなものとされました。テモテは、パウロの信頼を受け、教会に承認され、聖霊の確証を得ました。

1. 悪い戦いをしない

「良い戦い」とは何でしょうか。(注: 英語の聖書では、18節の「勇敢」は good と訳されている) 「良い戦い」という表現があるということは、全ての戦いが良いわけではないということを示唆します。この手紙全体で、テモテは、不必要な戦いの危険についての警告を繰り返し受けています。議論を引き起こすことに関わってはならない(1テモテ 1:4)、教会の長老として争ってはならない(3:3)、議論や争いに不健全な興味を示す人にはせ教師である(6:4)などです。このような争いに関して聖書は私たちに警告します。なぜなら、クリスチャンの戦いのほとんどが悪い戦いだからです。争いや議論は、教会にとって長期的な危険となります。教会が戦う戦いはほとんどが内紛で、多くの場合、身内からの攻撃によって傷を受けます。

キリスト信仰に重要ではない事柄についての争いは、たいてい悪い戦いです。私たちは、聖書のすべての真理を議論し、信じ、実践しなければなりません。今オーストラリアに住むクリスチャンとして、私たちは聖書の定める結婚を守るために戦うべきです。それは、この国の益となります。しかし、全ての場面で、全ての聖書の真理が議論される必要はありません。議論を引き起こしたいがために聖書の真理が用いられるようなことがあってはなりません。教会の伝統もしばしば、不毛な争いを引き起こします。事務的な事柄は、霊的な結果にほとんど影響を及ぼしません。教会のじゅうたんの色を何色にするか、毎週教会に花を生けるかというようなことで苦々しい争いがこれまでの教会にありました。

良い戦いと悪い戦いを、どうすれば見極めることができるでしょうか。それには、以下のことを考えてみてください。

- ・この問題は、1年後に影響を与えるだろうか。それほど重要な問題か。
- ・この争いを私は、意地悪く楽しんでいるか。

- ・この戦いは私のためか、それとも人のためか。－ 他人の霊的興味を守ることや、神様ご自身の栄光のために戦うことと、自分自身の欲求を満たすことは全く別です。
- ・私は、自分の行動を、自分自身に対して、また人に対して正当化しようとしているか。

2. 良い戦いをする

悪い戦いはたくさんありますが、良い戦いは一つだけです。それが、パウロが18節に記した戦いです。彼のいう戦いは、キリスト信仰の中心となる教義を守る戦いです。パウロはこの手紙の冒頭で、テモテに間違った教えに反対するように強く言っています。良い戦いとは、正しい教えの戦いです。パウロは「信仰と正しい良心を保つ」(18節)ように語りながら、「正しい良心と偽りのない信仰」(5節)を見失ったにせ教師との明らかな違いを示しています。

良い戦いとは、キリストにある信仰にとって重要な教えを守る戦いです。ここでいう重要な教えとは、三位一体の真実性、イエス・キリストの神性、贖罪の必要性、そのためにキリストの十字架の死が十分であること、信仰によってのみ罪が赦されること、聖書に誤りがないことなどです。このようなキリスト信仰の中心となる真理は、戦って守る価値があります。パウロの命令は、正しい教えを当たり前だと思わないように私たちに注意を呼びかけます。神様の民は、決して休まることなく、常に戦ってきました。聖書のあちらこちらにそれを見ることができます。新約聖書の書簡のほとんどは、正しい教えに関するものです。その後の教会の歴史は主に、教義上の対立の歴史です。第一ニカイア公会議(325年)では、三位一体の教義が守られました。エフェソス公会議(431年)では、人間中心の教えを主張したペラギウスに対し、神様の恵みの主権を守りました。コンスタンティノポリス(381年)、エフェソス(431年)、カルケドン(451年)の公会議では、キリストの神性を守りました。

中世には、救いの方法が攻撃を受けました。そして、結果的には聖霊が教会を今で言うプロテスタントに改革されました。そのとき守られなければならなかったのは次の教えでした。信仰とその実践の基準は聖書のみことばのみであること(聖書のみ)、神様と人との仲介者はキリストのみであること(キリストのみ)、信仰によってのみ義と認められること(信仰のみ)、神様の恵みだけが救いをもたらす神様の御力であること(恵みのみ)、そして神様の栄光がますます輝くために、これらの教義が守られなければならないこと(神様の栄光のみ)です。教会の歴史を見れば、パウロのテモテへの命令が必要なものと確信させられます。キリストの再臨まで、神様の民は間違った教えに対して絶えず戦い続けるのです。キリストにある信仰は常に、異教だけでなく、とくに異端からも守らなければなりません。迫害は最終的には福音を前進させる助けとなることがよくありますが、異端は常に教会やその働きを傷つけます。

本物と偽物の間には、常に避けられない戦いがあります。テモテはその戦いに備えなければなりません。私たちがそうしなければなりません。では、私たちにとって良い戦いとは何でしょうか。第一に聖書には間違いがないということを守るための戦いです。ウエストミンスター信仰告白の第一章にこうあります。「聖書がそのために信じられ服従されねばならないところの聖書の権威は、どのような人間や教会の証言にも依拠せず、(真理そのものであり)その著者であられる神に、全く依拠する。従って聖書は、神のみことばであるという理由から、受けいれられなければならない。」最近の福音派の神学校や教会の教師や生徒の中には、聖書の語る正統な教えを堅く守らない人もいます。中には、聖書の無謬性(むびゅうせい)と無誤性(むごせい)に一線を引き、聖書の権威を疑問視するような解釈を主張する人もいます。聖書が神様のみことばであるという真理はこれからも続いて教えられ、守られて行かなければなりません。

二番目に、救いはキリストによってのみ与えられることを守る戦いです。いわゆるポスト保守的な福音派と呼ばれる教会の中には、イエス・キリストだけが救いへの道ではないという考えを受け入れる人が増えています。イエス・キリストは救いへの道のひとつであって、唯一の道ではないというのです。また、エマージング・チャーチと呼ばれる教会の指導者の中には、イエス・キリストの血による贖いがそれほど重要ではないという人もいます。ですから、私たちはパウロが次の章で教えている真理を守り続けて行かなければなりません。「神は唯一です。また、神と人との仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。」(1テモテ2:5)

3番目に、良い戦いとは、信仰のみを通して、神様の恵みにより義と認められるという真理を守る戦いです。昨年、パウロのローマ人へ宛てた手紙から学んだように、罪人は信仰を通してキリストの義に覆われ、神様に義と認められると聖書は教えています。聖書の教える義認の教義も攻撃を受け続けているので、私たちはしっかりと守らなければなりません。21世紀の教会が直面する戦いは、これまで常に戦われてきたものです。「神のみことばとは何か。」、「イエス・キリストとは誰か。」、「救いの道とは何か。」ということが集中して攻撃を受けます。キリストにある信仰を守る良い戦いは、常にしなければなりません。私たちが戦う理由は、私たちには敵であるサタンがいるからです。この敵はカルバリで死の一撃を受けていますが、私たちの主イエス・キリストの再臨まで成敗されません。

良い戦いは、単に信仰の問題だけではありません。生活の面でもそうです。パウロは18節でテモテに「信仰と正しい良心を保ち」なさいと命じています。正しい良心は正しい生活から来るものですから、テモテは教えを実践しなければなりません。クリスチャンの生活は、その信仰と同じくらい重要です。正しい教えを守ることは、信仰だけでなく、実践でも重要です。信仰と正しい良心という二つの美德は1テモテの中で三度一緒に述べられています。(1:5、1:19、3:9) この二つは切り離せません。それは、ちょうど水分子が、酸素原子か水素原子を失ったら水でなくなるようなものです。同じように、クリスチャンが信仰か正しい良心を失ったら、その人はもうクリスチャンとして生きていないのです。信仰と正しい良心は様々な面で切り離すことができないものです。間違った教えが道徳の墮落につながることは明らかです。神様のみことばを正しく理解しなければ、行動も間違ったものになることは避けられません。しかし、逆もまた然りです。間違った良心はしばしば、間違った教えにつながります。カルヴァンが「間違った良心は、全ての異端の根源だ」とまで言っているほどです。人はよく、自分の罪を正当化しようとしませんが、その人の悪い行動は間違った教えへとつながるのです。

3. 破船!

クリスチャンが信仰やそれに沿った生き方を捨てると、どうなるでしょうか。パウロはこの命令を二つの悲劇を例に挙げて終えています。それはエペソの教会にいた悪名高いヒメナオとアレキサンデルの事です。ヒメナオのことはパウロからテモテへの二通目の手紙にも次のように記されています。「ヒメナオとピレト…彼らは真理からはずれてしまい、復活がすでに起こったと言って、ある人々の信仰をくつがえしているのです。」(2テモテ 2:17-18) アレキサンデルも他の箇所にも名前が出てきます。「銅細工人のアレキサンデルが私をひどく苦しめました。そのしわざにに応じて主が彼に報いられます。あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らったからです。」(2テモテ 4:14-15) しかし、使徒 19:33-34にあるエペソで起こったアルテミスの騒動の中で会衆に弁明しようとしたユダヤ人のアレキサンデルとはおそらく別人だと考えられます。

パウロの挙げたこの二人は、信仰と正しい良心を捨てることで「信仰の破船に会いました」。ですから、パウロは「彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです」。彼らが信仰と正しい良心を「捨て」たことから、彼らがよく考えて、自分の意志でキリストにある信仰を拒否するという選択をしたことが、この聖書箇所からはっきりとわかります。その結果が破船です。彼らの教えは間違ったものになり、神様のご性質を中傷するという間違った行動へとつながりました。

ヒメナオとアレキサンデルは信仰を失ってしまったように見えます。ここから、聖人たちの忍耐の教えについて、どんなことが言えますか。また、イエス様の「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:27-28)という確証について、どんなことが言えますか。ヒメナオとアレキサンデルが信仰を失ったなら、誰が救いが確実にあると自信をもって言えますか。この難しい問題の一つの見方は、ギリシャ語が示すように、ヒメナオとアレキサンデルが失ったのは「彼らの信仰」であって、「キリストにある信仰」ではなかったということです。この二人がそもそも救いを得る信仰を持っていたとは聖書は言っていません。また、これよりも良い見方は、ヒメナオとアレキサンデルにはまだ希望が残されていたと認識することです。破船をしても生きのびる可能性があることを誰よりも知っていたのはパウロです。(2コリント 11:25 参照) また、この二人が犯した罪、つまり神様への冒瀆はパウロ自身が犯した罪

でもありました。(1テモテ 1:13) パウロは、冒涇を赦され、破船から救われることが可能だと知っていました。

これら全てを踏まえると、パウロがヒメナオとアレキサンデルをサタンに引き渡した意味が分かります。「サタンに引き渡す」という表現は、教会の教育指導に関係します。これはユダヤ人の会堂から受け継がれ、罪の矯正を指しています。教会の教育指導はマタイ 18:15-20 に記されているイエス様のことが全てを含みます。罪を悔い改めない教会員は最終的には教会から出されなければなりません。そして「教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人や取税人のように扱いなさい」とあります。(マタイ 18:17) 教会の交わりからある人を取り除く決定は、ときに「破門」と呼ばれます。その人は聖餐式の sacrament を受けることが禁じられます。また、その人は神様の保護からも取り除かれます。パウロはヒメナオとアレキサンデルを、サタンの力の及ばない神聖な場所であると考えられていた教会から取り除きました。ここで、ヨブがサタンに引き渡されて、どれほど苦しんだかを思い起こしてみましょ。またコリント人たちが主の晩餐に正しく臨まなかったために、病気にかかったり、死んだりしたことを思い起こしてみましょ。(1コリント 11:30) ヒメナオとアレキサンデルも、サタンに引き渡されたとき、同様の危険にさらされました。

しかし、それは全てヒメナオとアレキサンデルが霊的に益を受けるためでした。パウロが彼らを破門したのは、「神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるため」でした。教会の交わりや保護から引き離され、世に入れられたことで、神をけがしてはならないことを、学び、訓練を受け、矯正されるためでした。パウロの熱い願いは、神様がヒメナオとアレキサンデルをご自身のもとへ引き戻してくださることでした。訓練や指導は、ただ罰を与えるだけが目的ではなく、罪人を立ち直らせるためのものです。傷つけるためのものではなく、癒すためのものです。正しく用いられるのなら、教会の訓練や指導は神様の栄光、教会のきよさを保ち、聞き従わない罪人を取り戻すことができます。

牧会をするなかで、ときに罪人を救うために、あえて神様の守りの外へ出すことがあります。その働きは容易ではありません。しかし、戦いはいつも容易ではないのです。クリスチャンとして、私たちは兵士であることを忘れてはなりません。パウロは死ぬまで神様の軍にとどまりました。彼がテモテ二通目の手紙を記した頃には、パウロは多くの戦いを経験したベテランでした。この手紙の終わりで彼は司令官の最期の言葉を、副司令官に残しています。「私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の表れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」(2テモテ 4:6-8)

人生の終わりに「私は勇敢に戦った」と言えたら、なんと素晴らしいことでしょう。しかし、それよりも素晴らしいのは、戦いの褒美を受けることです。私たちの主であり救い主であられるキリストが戦いに勝利されると、彼と共に戦った兵士たちは、勝利の冠を受けます。ウィリアム・ウォルシャム・ハウは、福音の戦いを終えた兵士たちのために「この世にイエスの御名を」という素晴らしい讃美歌を作りました。

アーメン